

地域の底力

あがつま
群馬県吾妻郡草津町

「温泉しかない」 その思いが 「温泉の王者」を支える

日本一の自然湧出量と素晴らしい泉質を誇る、
大地の恵み「草津温泉」を授かり、
湯治場として栄えてきた群馬県吾妻郡草津町。
バブル期を経て大きく時代が変わった今、
町の人々の思いはひとつにまとまり、
観光地としてのさらなる進化を目指す。

歴史と泉質が培った 「王者草津」の名声

草津よいとこ、一度はおいで。

草津と聞いて、おそらく多くの方が民謡「草津節」のフレーズを思い出すことだろう。そこに歌われる草津温泉があるのは、群馬県北西部に位置する吾妻郡。源頼朝、奈良時代の僧・行基、はたまたヤマトケルが開湯したとも言われるほど、歴史は古い。

文献に登場するのは、室町末期。江戸時代には既に湯治場としてにぎわい、徳川吉宗が湯を気に入って江戸まで運ばせたという逸話も

後に生まれた。明治時代にはドイツの医師エルヴィン・フォン・ベルツにより、高原の保養地として世界にその名が広まった。

現代においても、その支持の高さは変わらない。旅行業界の専門紙「観光経済新聞」主催の「にっぽんの温泉100選」では、一年連続でトップ。「日本経済新聞」ほか、各種メディアによる読者アンケートなどでも軒並み一位に選ばれ、業界では「王者草津」とも呼ばれている。

人口約七〇〇〇人の町の行政を司るのは、二七年来に及ぶ町会議員の経験を経て五年前に町長に就任

した黒岩信忠氏だ。草津温泉の人気の秘密と、その背景を伺ってみた。

「これまで来訪客が最大だったのはバブルの時代で、年間三〇〇万人でした。その後、二七〇万人を切ったものの、現在は二八〇万人を超えて右肩上がりになってます」

バブル期における事業の拡大やその後の不況が影響し、今も低迷に悩む温泉地は少なくないが、この地の来訪客が一割程度の減少に収まったのはなぜなのか。

「やはり、長い歴史ある温泉地の底力だと思えます」

とはいえ行政サイドが、過去の遺産だけに頼ってきたわけではない。

すり鉢状になった草津の温泉街の要は、温泉が湧きあふれる湯畑。そこに面する一角には、江戸時代から明治時代にかけて実在した温泉施設「御座之湯」が二〇一三年に復元された。さらに、一四年夏の「湯路広場」も完成し、かつての殺風景な駐車場は、ベンチも設けられ、今や憩いの場へと変身。「美しい景観が町を活性化させる」

「長年湯治場としての歴史を紡いできた草津の人には、おもてなしの心がDNAレベルで継がれている」と話す町長の黒岩信忠氏。



という、代々の町長の思いが継がれた歳月が実った。

そんな湯畑のまわりは昼夜を問わず人でにぎわう。そこを黒岩氏は足繁く訪れ、周囲の声に耳を傾けるそつだ。

「草津って変わってきたね、きれいななったね、などという会話が聞こえてくるんですよ」

一帯には若い人の姿も多く見られたが、実際、若年層、ことに女性の来訪客が増えているともいう。

「若い女性を対象に、草津を選んだ理由を調査したんです。その一



上／1878年に草津を初めて訪れ、温泉と自然環境を高く評価したエルヴィン・フォン・ベルツ博士の像。左／湯畑近くの草津山に建つ「光泉寺」は、1300年近い歴史を有し、その薬師堂は行基が721年に開基したともいわれる。



14年に復元された「湯座之湯」の名は、この地で源頼朝が腰を掛けたとの言い伝えに由来する。



山間という町の立地を活かして「湯路広場」の一画は段々畑のように設計され、景観に心地よいアクセントをもたらす。

負の遺産を断ち切った 大胆な財政改革

とはいえ、町の人口は減少傾向にあり、日本創成会議が発表した「消滅可能性都市」にも含まれている。

番の理由は、温泉の効能がすばらしいから。うれしかったですね」
草津温泉は、硫黄を含む強酸性。湯に入れば、じわじわと肌にしみ、しかと癒やされる感がある。自然湧出量は、毎分三万二、三〇〇リットルと日本一。しかも、なんと五〇〇〇年先まで尽きないそうだ。

る。

「草津町の定住人口は減っていませんが、就労人口の数は逆に伸びています。商店や旅館の数も増えています。今、草津町は人手不足なんです」

「就労人口イコール定住人口といかないのは、短期間で働く人もいれば、孀恋（おとこづき）をはじめ近隣から通う人も多いからだそうだ。

「人口減は市町村が成り立たなくなることの意味します。しかし、草津町の経済圏は、温泉が湧く限りしぼむことはない」と判断しているんです」

そう話す黒石氏は、草津活性化の政策に打って出るため、町長就任後に大胆な財政改革も行った。そのひとつが、草津町がオーナーとなる第三セクター「草津観光公社」の建て直しだ。

「観光公社が、赤字から脱却できない温泉施設を持ち悩んでいたちょうどその頃、耐震強度の問題で保育園の建て替えの話が持ち上がった。子どもたちのためにも建て替えは優先しなくてはならないが、費用は四億円もかかる。そこで、耐震上は問題が無い

その温泉施設を再利用することにしました。結果、改装費は一億円円で済み、公社の赤字増大のストッパーと工事費用の軽減という一挙両得となりました」

大胆な財政改革は、切り詰めだけではない。ほかでは例のない、固定資産税の負担軽減も断行した。

「固定資産税は、町の税収の約六五％を占める。しかし温泉でもうけて温泉で損をすると言われるくらい、草津の建物は劣化しやすい。強酸性の泉質の影響を受けるんです。町民経済の浮揚を考え、減免したんですよ」

減免の根拠を得るべく一年かけた科学的検証で、実際にコンクリートを温泉につけたところ、わずか一カ月でぼろぼろに。もちろん、固定資産税一億三〇〇〇万円の減収には反対意見が多かったが、地方交付税制度等を利用すれば、国からの補てんを含めて財政に大きな穴をあけることがないのを黒石氏は確認して実行した。

財政の大きな負担だった「草津観光公社」の現状を伺ったのは、代表取締役社長の長井英二氏だ。

「観光公社が所有しているのは、



(株)草津観光公社代表取締役社長の長井英二氏。「草津国際スキー場」のゲレンデ頂上から好天の日に望遠鏡をのぞくと、「東京スカイツリー」も見えるほど見晴らしがいいとか。

スキー場とゴルフ場と道の駅。そして三軒の日帰り温泉。草津の場合、このドル箱の温泉施設があるからこそ、ほかの施設を維持できるんです」

前出の「湯座之湯」は、そのドル箱のひとつ。さらに従来から人気施設だった「大滝乃湯」も、一昨年の改築で前年比三六％の増収と大成功を遂げた。残る「西の河原公園」もまた、散策道路の雪を温泉熱で溶かす設備が整えられる等リニューアルが計画されており、今後に期待がかけられる。

しかし、今も公社の売上の半分を担うのは、バブル時代のピークに八〇万人だった来場者が、今や

草津町商工会でお話を伺ったのは、右から建設業を営む会長の武藤義徳氏、建設業ほか食堂や旅館を経営する副会長の後藤文雄氏、同じく副会長で土産物の卸、販売業の堀田洋一氏。業種は異なれど、草津を思う心はひとつ。



二〇万人にまで激減したというスキー場だ。日本の民間スキー場として最初にリフトがかけられ、一三年には百周年を迎えた由緒ある施設。標高二〇〇〇メートル級の雄大な景観も楽しめるゲレンデは、国内でも稀な存在だ。

「リフトやロープウェイの大改修を行い、ゲレンデも整備したので、今後お客さんに魅力を感じてもらえるようになるでしょう。もとより、かつてのように若い人が日帰りに来てがまん滑るのではなく、温泉と絡めて泊まりでゆっくり来てもらう場所を目指しています。ゴルフ場も同じ。あまり欲は出し

てないんです」

自身も大のスキー愛好家である長井氏によれば、スキー人口は底を打ち、最近では緩やかな増加傾向にあるとか。温泉という支えを受け、草津の楽しみ方としてこれから先も訪れる人の記憶を彩ることだろう。

官も民も一丸となり 町の活性化に励む

町の未来を考えているのは、もちろん行政サイドだけではない。草津を巡って印象深かったのは、官民関係なく一体となった絆の強さを感じたことにある。四五〇軒の会員を抱える草津町商工会では、会長・武藤義徳氏が草津の魅力を率直に語ってくれた。

「イベントをはじめ何かあると、皆がまとまる。山の中の小さい町



草津町の魅力の原点である「泉質主義」を掲げたのは13年前のこと。

ですし、明治時代に温泉場の大半が燃えた大火を経験しているので、皆で手をつなぎ合っている。そういう意味で、草津はとても生きていきやすい町だと思っんです」

ほかの温泉地へ視察に訪れ、その湯に入っても、「帰りの車のなかでは、早く草津に帰って風呂に入りたと思う」と冗談めかした武藤氏の笑顔に、町への愛情がうかがいしれてうれしくなった。

一〇年から始まり、商工会も力を注ぐのは「街なみ環境整備事業」だ。温泉街地区、外周の高原地区をはじめ町を五つのエリアに分けて場所に応じた協定が結ばれ、景観のための改修には補助金が出される。副会長の堀田洋一氏いわく、



草津町は町役場が全国で二番の標高に位置する自治体。温泉だけではなく、眺望を楽しめる「白根火山ロープウェイ」やトレッキングの楽しみも待ち受ける。

町は確実に情緒ある景色を取り戻しているという。

「自分たちの地域を知るため、皆が歩きまわり、それぞれ意見を出し合いながら討論を重ねた。住民が当事者として景観を考え、その歴史や文化を学び直したからこそ、結果につながったんだと思います」

また、将来を見込んだときに、外国人観光客、いわゆるインバウンドへの対応が必要だと話すのは、同じ副会長の後藤文雄氏だ。ことに海外ではごく日常的なクレジットカードがあまり使えない草津の現状を変えるべく、商工会は先頭に立って動いている。

「外国人客は面倒。言葉が通じないから要らない。そんなことは言っ



(注) 草津温泉は、以下三点を掲げ泉質を大切にしている。①自然湧出泉として湯量日本一、②源泉かけ流しの天然温泉、③強力な殺菌力を誇る温泉。

ていられない時代になっている。草津は一〇〇パーセント観光で成り立っている町ですから、そのあたりについては皆さん、理解してくれています」

観光に特化した町だけに、訪れる人々を実際に出迎え、もてなすのは温泉旅館。その代表として最初にお会いしたのは、「望雲」の代表取締役であり、「草津温泉旅館協同組合」の理事長を務める黒岩裕喜氏だ。

「バブル以降も急激な落ち込みがなかった一番の理由は、首都圏の一角にあるからでしょう。昔から気軽に来られる温泉場だったのが、草津の強みです」

出発地でもっとも多いのは東京都。続いて、埼玉県、群馬県内。



草津温泉旅館協同組合理事長の黒岩裕喜氏。若手を含め世代を超えてイベントにも取り組める、風通しの良さが組合内にはあるという。

リピート率は約六割だ。

組合では一三年前に、基本に帰ったテーマ「泉質主義」(注)を打ち出した。草津温泉のよさを、誰しもがひと言で説明できるようにするのが目的だ。

「これまで各時代の人たちがいろいろな試みを取り入れて、草津の町を維持してきました。我々の世代は、それを継ぐための努力を皆でしなければなりません。皆で努力するうえで、草津には江戸時代から温泉を公平に分け合ってきた不文律があるのは大きいですね。約九五%が町の管理。温泉の恵みで食べていることを、昔から感じていたんじゃないでしょうか」

限られた人が権利を持っている温泉地では、後からの参入者が苦勞し、トラブルの一因になることもあるようだ。

草津の旅館、民宿の数は寮や保養所を合わせて、約一五〇軒ほど。来訪客は増えているが、稼働率は決して高いわけではない。

そんななか、明るい未来を感じさせたのは、客足が落ちる冬場の状況だ。

「外国のお客様が増えているんで



「熱の湯」では湯の温度を下げる草津独自の「湯もみ」を、「草津節」とともに披露。14年秋から改築工事が始まり、15年春には大正ロマンをテーマにした建物に生まれ変わる。下/完成予想図。



す。雪のある冬の温泉というのが、魅力的なんですよ」

積極的な外国人客への対応としては、商工会でも話題になったクレジットカードに加え、Wi-Fiの環境整備も進められている。

町が一丸となった、マスメディアへの対応も、宿泊客を誘う大き

な支えだ。

「観光課や観光協会の皆さんをはじめ町全体がメディアの方々を快く迎え、丁寧に案内してくれる。その積み重ねが、さらなる取材につながっていると思います。非常にありがたいですね」

ニュースや温泉紀行など、草津には年間七〇〇〇八〇件ほどのテレビ取材が入る。飲食店や土産物店は飛び込みの依頼でも厭わないため、「困ったときの草津頼み」ともいわれるそうだ。

そのもてなしの力は、一四年公開の映画『テルマエ・ロマエⅡ』のロケ地選ばれた際も最大限発





湯畑のまわりの欄干には、歴史上の人物から名だたる政治家まで、草津を訪れた100人の名前が刻まれている。



「草津ハイランドホテル」代表取締役の宮崎謹一氏と、娘さんで若女将の西場貴子氏。ホテル創業と宮崎夫妻の結婚は1964年。14年はともに50周年を迎え、記念すべき年になった。

揮された。いいPRになる、町をあげて全面的に協力しようとの流れは早々に決まり、大勢のエキストラの要請に関しては、役場はもちろん、観光協会や商工会、旅館組合にまで集合指令が飛んだ。帝政ローマ時代の設計技師が、日本の温泉地にタイムスリップする物語は大ヒットに。作品の公開直後から、草津への来訪客数は明らかに増えてきた。

豊かに湧き出る温泉が草津にある限り

各施設をみれば、創業五〇年の「草津ハイランドホテル」の食の面からの改革にも心惹かれた。あらたに考案した「草津味（くさつみ）料理」について、代表取締役の宮

崎謹一氏が説明する。

「草つみ（自然食）」と草津をかけたんです。旅館に来て宴会を、という時代ではありません。健康志向のお客様に向け、湯治場という草津温泉の原点を考え、体の外からも中からも健やかにとの発想でした」

玄米菜食のマクロビオティックも合わせ、ベジタリアンが多い海外からの客をも見据えた展開だ。

若女将・西場貴子氏もメンバーである、女将会の存在も興味深い。

「ほかの地域にもありますが、草津の女将会の活動は活発ですね。温泉の権利が平等なのが、仲の良さを支えているのかもしれない」女将会で考案した化粧品は、売れ行き好調。女将たちが勢ぞろい

観光客が散策を楽しめるようにと、温泉街の各所に道しるべが設けられているが、景観を邪魔しない奥ゆかしさがある。



創業300余年。草津でもっとも古い歴史を誇る宿泊施設のひとつ、「ホテル一井」常務取締役の市川祥史氏。「一井」の名は一番井戸の意。

した、華やきあるポスターも町でたびたび見かけた。多忙な皆さんが時間を合わせるのには、容易ではなかったはずという言葉に、宮崎氏がうなずく。「町ぐるみでやれるのが、やはりいいところですね。よそには農業をはじめ観光以外の産業がありますが、草津は観光一本ですから、まとまりやすいんですよ」

結束力の強さは、創業三〇〇余年の「ホテル一井」常務取締役の市川祥史氏の話からも感じられた。「ほかではお客の奪い合いのよう

な話も聞くのですが、草津では仲間という意識が強い。ライバルという言葉も聞きませんね」市川氏はもともと東京で広告業に携わっていたが、八年前の結婚を機に町の一員となった。町に来て草津の四季の変化に感動したという。

「一番好きなき季節は春。本当に芽生えの香りがするんですよ。夏は涼しく、秋には紅葉が見られます。冬は雪を見ながら露天風呂に入れるのが幸せ。五感に訴えるものが、草津には十分ある。雪や寒さを味方にして集客につなげられたら、面白いと思うんです」

訪れた人の五感に訴えるのは、欧州から著名な演奏家を招き、コンサートとレッスンが行われる、

草津温泉観光協会の会長も務める中澤敬氏は、かつては草津町町長として行政に携わった。また、国土交通省が中心となって選定した「観光カリスマ」のひとりでもある。



「草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル」が開催される「草津音楽の森コンサートホール」は608名を収容できる。

「草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル」もまた然り。一九八〇年から続けられ、国内外での評価も高いが、理事の中澤敬氏は当初の苦勞を振り返る。
「当時、地元には、温泉とクラシック音楽は関係ないという反対意見がありました。県をはじめいろいろ

々な方々のバックアップで、なんとか実現にこぎつきましたが、始まって一〇年ほどは毎年、来年はどうなるか不安でたまりませんでした」

しかし、主催者のひとりであり講師としてもアカデミーを支えてきた、ピアノリストの遠山慶子氏が美智子妃殿下にピアノを教えた縁で、やがて天皇后ご夫妻が毎年、訪れるという榮譽にもあずかった。

「五年間も続いてきた理由はやはり、草津が素晴らしいから。非常に快適に過ごせると、演奏家の方たちもおっしゃっています。パブル期には各地で音楽祭が生まれましたが、宿泊施設がないところでは続かないケースが多かった。財政難で、多くの先で中止にもなりました。草津の場合は、町と県に理解があり、音楽祭と温泉街との連携プレーも良くなっています」
九一年には、本格的な「草津音楽の森国際コンサートホール」も誕生した。その周囲は、豊かな木々の緑に彩られている。

草津は実は、土地価格が群馬県内で三番目に高い。町が元気な証

草津町の憲章「歩み入る者にやすらぎを去りゆく人にしあわせを」は、ドイツ・ローテンブルク市の門に刻まれた言葉を東山魁夷画伯が翻訳したもの。



しである一方で、七〇%が国有林で民地が限られるのも大きい。この不利な環境も、観光に全エネルギーを注ぐ原動力になっている。

「草津はお客様が来なければ、経済が回らない。観光業だけではなく、建設業も商工業も皆一緒です。ですから、議論はとことんしても、意思決定したら皆で同じ方向を向くんです」と話していた黒岩町長の言葉を思い出した。

町長を先頭に行政、議会、観光協会、商工会、旅館組合、女将会のトップが、東京の大手エージェンツ回りを行う「トップセールス」は、その真骨頂だろう。「王者草津」は決して、その座に甘んじていない。

取材からの帰りしな、湯畑を眺めながら「ホテル一井」の市川氏の言葉が胸をよぎる。

「仕事で迷いがあると、湯畑を見に行くんです。ふつふつと湯があふれているのを眺めていると、細かいことは気にならなくなる」

温泉とともにその温もりにつながれた町の人々の熱い思いもまた、草津ではそこかしこから湧き出ているに違いない。



観光客の楽しみに限らず、湯畑の眺めはこの町に暮らす人々にとっても心の拠り所になっている。